

異業種参入から学んだ事は「感謝」

はじめに

私は今から10年程前から林業に関心があり、なぜなら環境対策の一環としてマスコミからも注目されていた時代背景があった。そして平成20年に本業の建設業から林業に進出し、林建協働という取組を推進する為に協同組合を立ちあげた。その頃は政権の影響もあり、公共投資が削減され、各社売上げも激減した。地元の建設業としての仕事の確保、雇用の確保を優先に考え、建設業以外でも仕事ができる体制、人材育成を求めこの取組みを始めたのが本当の目標であった。林業は人材不足と高性能林業機械での施業が求められる程、森林事業が拡大していた。高山市のように広大な森林を持ち、従来から地域の森林を管理していた地元森林組合との調整を重ね、行政の支援を頂きながら着実に実績をあげた取組みは、他地域などからも評価を受け、それなりに頑張ってきたことで、現在に至ったと思っている。

林業は奥が深く、川上から川下までの産業間で結ばれ、一つもかけることない工程の中で産業大系であるので、いかに森林を管理し、材を搬出し、製材、そして利用されるまでの流れが定められている。産業構造としての課題や規制もかなり制約さえているが、今後の環境やエネルギー施策などの多面的な機能を有することで今後も注目されていくと思われる。

感謝の心

数年前、私は奈良県の吉野に視察に出掛けた。広大な森林に、驚くばかりの杉や、檜の大径木の森林が管理された状況に感動した。そして有名な林業家の言葉「山の管理とは山も人も喜び大切な事である。しかし作業道は人の都合で作る物、山は決して喜んではない。だから道を作らせて頂くという感謝の気持ちをもって誠心誠意作らねばならない」と話された。この言葉を聞いて、やはり先人達が山に木を植え、長い間管理し、このような森林を作り、財産として子供に引き継ぐ苦勞に対し、心から感謝しなければならぬと感じた。林業に従事する方は皆さん、山に感謝という事が自然であり、本来の人間のあり方を痛感し、今の世の中で一番足りないものだと感じた。

建設業には林業のように「感謝」というキーワードがあるのかどうか考えてみたが少し違う様な気がした。我々は安心、安全な生活をおくる為の社会インフラの為に、責任を持って仕事に従事している。我々は公共事業という仕事の中で、いかに仕事を受注するか、利益をだすかという事会社経営となっているような気がする。当然企業としては大切な事ではあると認識している。様々な会社では社会貢献活動や環境の取組み活動などもやっているが、大体は入札の総合評価や加点などの為ではないだろうか。本当に地域に感謝し、住民に仕事をさせて頂くことに感謝し、安全な作業で関連する協力会社や従業員に感謝し、まして工事箇所の自然などにも感謝の気持ちを持って仕事をしているかと聞かれたら、はいとは

言えないのではないかと思います。

雇われている人でも今日も安全で家に帰ることができ、家族や子供達、ペットに会えることにも感謝。今日も働くことができたと会社に感謝。お互いに感謝する気持ちを持てば素晴らしい業界、会社、家庭になるのだと思う。この気持ちが、建設業に一番足りないものではないかと最近感じている。

国民は公共事業に対しイメージが良いとは言えない。いくら災害や防災などで必要だ、貢献していると声を大きくしても理解が得られないのはきっと感謝の気持ちが伝わっていないからではないかと思う。景気対策などで公共投資が大きくなると、建設業は儲かるというイメージが先走ってしまうのは、仕事をさせて頂くという気持ちが全体に伝わっていないからではないかと思う。今一度初心に戻って全てに「感謝」する気持ちを持とう。

むすびに

林建協働という中で取り組んできた事から様々な事を学んだ。きっかけは違うが、このように様々な側面から本業、別の業種に対し考えられるようになった事。今まで逢うはずも無かった様々な人との人脈が広がったことなど心から感謝しています。

林業においては樹木の時間と人の時間があります。人は長生きしても100年、樹木は長いもので5000年。これだけ時間軸が違う中で、その時の人の都合で木を伐り、活用する。時間を意識することで、人は樹木の時間に合わせていく覚悟を持つべきではないかと思う。人の都合に合わせて森林をいじくり回してしまうのではなく、樹木の時間を人の生活の中に組み込めるような社会を作り出す事は重要であり、やはり感謝の気持ちを持って将来に引き継ぐことが人の使命ではないかと思う

ドイツの哲学者であるアルフレート マーラーという人が恒続林思想を象徴するのが、「最も美しい森林は、また最も収穫多き森林」という言葉がある。経済性の追求は、その究極において、美を求める芸術的営為と一致するものと言っている。企業にとっても「健全なる企業組織体の恒続」、いつまでも「生き生きとして強健」で、選ばれ続ける企業になることは究極の目標であり、その目標を実現するためには、実は企業という一つの美しいものにする努力こそが大切なのではないかと思う。

森林同様、美しい企業は、また収益多き企業となるのではないか。それには皆さんから愛され、お互いに感謝される企業でなくてはならないのではないかと思う。

これから業界を変えるには、この気持ちを忘れず、心から「感謝」しようと思う。

長瀬 雅彦